備陽史探訪の会　6月例会

御幸町の史跡めぐり 資料

1、高田氏----------P1

2、木下夕爾の世界-----P3

3、御幸町年表------P5

4、正戸山城跡-----P7

5、倉光天神社と楢崎氏 P9

6、伝説ゆるぎ地蔵 - P11

主催 備陽史探訪の会

1990年6月10日発行
作成　後藤匡史
発行　備陽史探訪の会
〒720 福山市多治米町5-19-8
TEL 0849(53)6157

高田氏

高田氏は備中大下(大宜)大橋山城主にて室町時代初期伊予河野水軍の武将として高田若狭守、三河守二隊の軍を組織し元弘の乱には苦労した天神山城主高田重兵衛政信又天文7年(1538年)隣国陶山氏と戦い敗れた高田河内守則義は大門真明寺にて自刃法名端立院一到浄印大居士と称す。

天正10年(1582年)毛利氏小早川隆景武将高田豊後守重綱はかの有名な備中高松城攻防に隆景の武将として出陣しかし秀吉の水攻めにあい高松城は開城、高松城救援の食糧や武器補給の責を取って笠岡に帰国後有田教積院にて自刃

河内守子孫は駅家大橋、草戸大橋、当地御幸、坪生大橋地名のゆかりも出身地からとったとの説がある。

高田氏墓

元弘の変ニ苦労シタ、天神山城主高田重兵エ政信ノ氏孫高田河内守則義ハ争乱ノ天文七年芦浜城ヲ落チ大門真明寺デ自刃ス

近郷換回ノ高田河内守正重ハ豊臣氏ノ旗本ニ列シタガ福島高田氏墓正則ニ所領没収サレ一族ハ消滅水野勝成ガ入府スルヤ再ビ於登久ノ兄藤井好直親子ノ友情ニ浴シテ一族浮上上記子孫デアル

岩成高田氏ノ精霊ガ徳川中葉カラ此処ニ永眠シテ居ル

裏碑文上段

上記正重ガ子又右エ門ノ孫、渋津郡寺社田管理役久左エ門ガ水野勝俊ノ従第藤井敬負ノ孫ヲ娶ヒ迎エ学塾ヲ開イタ門弟墓ガ此処ニ現存ス元禄十一年藩公改易ニ伴ヒ高田氏モ異変シ川西屋雑屋ニ転業村方年寄ニ下ル別ニ川西屋商人宿ヲ開業シ村方取締役トナル同祖同族ノ高田氏ハ駅家大橋ニ正重ガ子正五郎ノ子孫草ケ大橋ニ、正重ガ子助四郎ノ子孫ハ笠岡茂平ト高之江ニ表記則義ガ未商ナリ

同下段　昭和53年3月　建之　8月吉日

管理主任　高田観仁

碑文選記　高田一夫

製作主任　高田勝利

各家代表者

高田 隼一	高田 茂作
武男	馨
剛	定
稔	剛
正治	泉
稔	博美
正弘	有二
徹	昇治
泰治、修治	忠司、護

含羞の詩人　木下夕爾の世界

生まれ育った故郷を、こよなく愛しほのぼのとしたその田園地帯を詩たった含羞の詩人木下夕爾は福山市御幸町上岩成の人である。

若い頃作家の井伏鱒二と釣をした芦田川の上流加茂川のほとり

又晩年は近くの稲付山あたりを散歩道として、今もその稲付山中腹の墓地に眠っている。

略歴

大正3年(1914年)10月27日広島県深安郡御幸村上岩成に生まる。(現福山市御幸町) 本名木下優二

広島県立府中々学校卒えて早稲田第一高等学院

家業を継ぐ為名古屋薬専

昭和13年同校卒業、家業の薬局を継ぐ

昭和14年田舎の食卓、第6回文芸汎論集賞受賞

昭和19年頃から俳句

昭和21年春燈創刊と共に、これに参加、久保田万太郎に認められる。

昭和24年詩誌木靴創刊主宰

昭和34年広島県詩人協会設立と共に推されて会長となる

昭和36年広島春燈会結成、機関紙春雷を創刊主宰 俳人協会々員

昭和40年8月4日 永眠享年50歳 法名・淳誠院釈夕爾

歌碑

○入日いま
大きく赤し山つつじ　　夕爾直筆
沼隈町中山南福泉坊　　昭和37年6月除幕

○家々や
菜の花いろの燈をともし　　昭和41年8月除幕

○海鳥りの
はるけき芒折りにけり
府中高校の門わき　　昭和46年同窓生等が
寄金して建立

木下家の墓　稲付山墓地

御幸町年表

欽明天皇3年(534年) 屯倉設置、万能倉、大橋、羽賀等

白雉元年(650年) 備後国より白雉を朝廷に献上 穴戸国

白雉3年(652年) 最初の班田収かく、鶴ヶ渡り、坂田渡り、大渡り
甘斬屋渡り、光台寺渡り

天武天皇4年(676年) 国司任命制度

霊亀元年(715年) 里を郷と改め、郷を〇〇里に改む
芦田川、吉野川、加茂川、高屋川の流出する砂
穴海は一面の沼となり森脇、柳原、馬家新
涯の地名残る

延元元年(1336年) 宗岡播磨守足利尊氏より宗岡郷を賜う(岩成)

正平6年(1351年) 南北朝争乱 守護代岩松頼宥正戸山城

天文17年(1548年) 大内氏和睦 毛利元就 神辺城包囲、正戸山城落城

享保11年(1726年) 中条村(神辺町)の車屋 地蔵尊寄進 (ひるき地蔵)

昭和5年(1930年) 陸軍大演習 天皇統監の地、正戸山
昭和12年(1937年) 村長三好与一郎の偉業による芦田川改修
昭和13年(1938年) 中津原、森脇、下岩、上岩成四ケ村合併
昭和37年(1962年) 御幸村福山市に合併 福山市御幸町

両統迭立の南北朝時代

- 宗尊親王(鎌倉6代将軍) - 惟康親王(鎌倉7代将軍)
- (88代) 後嵯峨天皇
  - (89代) 後深草天皇
    - (92代) 伏見天皇 - (93代) 後伏見天皇
      - (95代) 花園天皇
    - (90代) 亀山天皇 - (91代) 後宇多天皇 - (94代) 後二条天皇
      - (96代) 後西園寺天皇 - (97代) 後村上天皇 - (98代) 長慶天皇 - (99代) 後亀山天皇
      - 護良親王(征夷大将軍)
      - 懐良親王(征西大将軍)
  - 北朝一代 光厳天皇
    - 北朝二代 光明天皇
    - 北朝三代 崇光天皇 - 貞成親王
      - 北朝四代 後光厳天皇 - 後円融天皇
      - 北朝五代 後小松天皇 (100代)

南朝 - 大覚寺統
北朝 持明院統

正戸山城跡

標高50メートル、頂上およそ10平方メートルの本丸跡の地斜面を平に削っただけの平地が段違いに5ヶ所

南北朝時代観応2年(1351年)足利尊氏方の守護代岩松頼宥が守り南朝方の宮盛重、上杉、畠山が攻防した。

基の後200年の空白の後、室町末期の戦国時代 天文16年(1547年)大内、毛利連合軍に宮氏敗退落城す。

昭和5年(1930年)陸軍大演習がここ神辺であり昭和天皇がこの正戸山から統監した。今も記念の碑が建っている

南朝

足利直冬、上杉弾正少弼朝定、佐馬助朝房、宮盛重
畠山、桑原伊賀守重信、

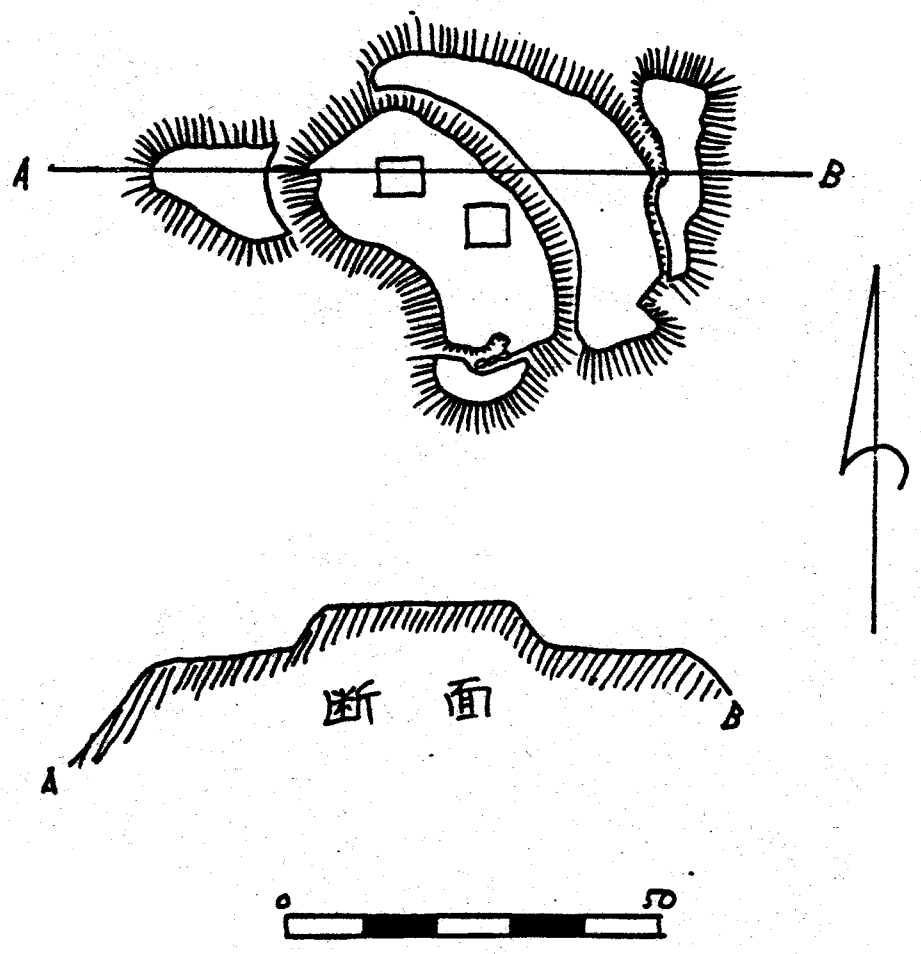
北朝

足利尊氏、守護織細川頼春、守護代岩松頼宥、
庄原地頭長井貞頼、鼓岡三吉覚弁、宮下野守
兼信、

延元元年(1336年)岡崎四郎義實の後裔宗(宗岡)播摩守足利尊氏より功により宗岡御を賜う。

駅家、広徳院真言宗、宗岡氏代々の菩提院、下岩成に屋敷跡あり、

正戸山城跡



倉光の天神社と楢崎氏

沖野申利床

行延土居城、中島にあり、岡崎（中島）三郎延実の居城、江良忠実の舎弟で延文（一三五六～六〇）の足利尊氏の九州遠征に加わり武功があり、その賞として、中世岩成庄といわれたこの近辺を兄弟一族で領した。江良・中島・倉光・近田氏等である。

江良氏は頼家将軍の時鎌倉に仕えた三州の士であって後備中の中島に住み中島を称していた。後毛利に仕えた中島大炊介は三郎延実の末裔である。

江良忠実は九州従軍中、太宰府天満宮に願を掛け功積があったので、天満宮を勧請して壮厳を倉光の地に建て岡崎一党の氏神とした。それは（一三五六）今より六百三十二年前の創建と言われている。

生きていた陶軍随一の智将江良丹後守

毛利家の興亡を賭けた厳島合戦の初期、陶晴賢の陣中にある岩国琥珀院城主、江良丹後守興房父子が目の上のコブ的存在であった。その江良丹後守父子をなんとかしなければと苦慮していた矢先、元就の住む郡山城下に晴賢の秘かに派遣した盲目の琵琶法師に化けた天野左衛門入道圭奄流れ込んで来た、元就はスパイと知りながらこれを捕えることなく、これを逆利用することを考えた。江良父子が元就に内通しているような偽手紙を見せた、圭奄はそしらぬ顔をしながら内心大いに驚ろき、その夜のうちに一目散し晴賢に報告した。

ここで思慮ある武将なれば元就の謀略ぐらいは見抜くはずだが、晴賢は圭奄の報告を信じ部下の勇将弘中三河守隆包が指揮する刺客隊を琥珀院城に指向け〝上意〟と言って有無を言わせず討ち取った。と陰徳大平記には書かれているが、彦三郎は討たれたが、父丹後はのがれて江良村に住んでいた。厳島合戦後、次男弾之亟伴って帰郷して江良村に潜伏していたと記されている。

毛利の中国地方制覇の頃は人目を忍び、福島時代には二男弾之亟が得意とする〝長剣の使い手〟もって出仕した。或る一日同僚と共に広島湾で釣りを楽しんだが弾之亟を嫉む者達が剣術論を吹きかけ、あげくの果て刃を抜いて斬りかかったので来たので、弾之亟も止むなく応戦して主謀者十二人を斬り倒し江良村に帰り父にその状を

告げたのである。そこえ福島家の勇士四、五十人が討手としてやって来た。弾之亟は家来と共に戦いながら上岩成の小藤山（正登山）に登ろうとしたが、家来は倉光村で討たれた。天神詞畔の塚は従者の墓で、弾之亟は山上で討死した。父丹後は婦女子をここかしこに隠して弾之亟を助けるべく後を追ったが追跡して来た数人を切り殺し力尽きて倒れた、往年の勇者も勇者も厳島合戦より経ること四十六～七年の後のことである。齢も八十歳を越していたと思われる。

この三人の奮斗により、福島家中の討手の大半は討たれて了ったという。江良父子の墓は小藤山の麓に有る。

この勇者の家系を永く保存するため、福島家改易後当時府中に居た楢崎三河守豊景の孫が名跡を継ぎ、姓を楢崎とした。あるいは江良父子の血縁者であろう。

楢崎氏の系譜

源為義―義広―師広（養子）―藤原氏右京進
①豊信―雅楽頭
②信康―同大和国宇多郡を領す
③清信―宇多三河守
④清宮―雅楽頭
⑤豊貞―同
⑥豊武―
楢崎加賀守
⑦豊貞―三河守
⑧清景―同藤原姓に改む
⑨宗豊―加賀守
⑩豊信―三河守
⑪宗真―同 享禄3死
⑫通景―同 弘治2死
⑬豊景―同
彦左衛門毛利元就に仕う
⑭信景―彦左衛門尉 輝元に仕う
⑮元兼―弾正のち弾右衛門 慶長元死
⑯元好―与兵衛吉蔵 長崎に移る
就―正兵衛

参考の為めの朝山二子城主楢崎氏の家譜

楢崎家の家祖①―豊信は「保元の乱」で父義広が殺されたので、兄義綱と共に駿河国奄原山中にかくれ住んでいたが、長じて源頼朝に仕之元歴・文治（一一八五）に軍功に依り、正治二年（一二〇〇）正月近江国栗本郡を賜り、同年五月備後国芦田郡の地頭職に補せられ朝山二子城を築く。

●……芦田郡の地頭職⑥豊武の事蹟

足利尊氏のとき⑥宇多豊武は功により芦田郡の地頭職を賜い、朝山二子城を築き子孫ここに居て楢崎氏を称し、のち毛利氏に仕う。

説 ゆるぎ地蔵

時代は享保の頃
新月を四貫った武士
が夫を斬りを思いつき
自宅の人を斬り附近にし
掛けの人を待っていた
ご無体だ!
ガヤガヤ
ワシが知らぬが決まりだの
ヤ武士
時は流れ或る大木詣にて
ヤ何者
これから

現在正戸山の山ろく
附近の人々の在来を
今もなおそうと
懸命に無事を祈っ
ながめている